

日韓中学生の競争意識と選抜システム

藤 田 武 志*

(平成14年1月31日受理)

要 旨

日本と韓国の中学生の競争意識について以下の六点が見出された。第一に、競争意識を抱く者は両国とも少数派であり、中学生たちの意識は必ずしも「受験＝競争」という図式でとらえることはできない。また、第二に、家族ぐるみの受験競争というイメージは、日本よりもむしろ韓国に対してあてはまる。しかし第三に、両国とも競争意識を抱く者が存在しないわけではなく、その割合や分布は、選抜システムの特徴によって規定されている。また第四に、競争の状態を不安感や内申書への気遣いといった意識面と、学習時間という行為面からとらえた場合、やはりそのありようは両国とも選抜システムの特徴と対応している。さらに第五に、東京都の競争の状態については、「ユニバーサル選抜型」推薦入試の導入という選抜システムの要因を加えると、より説明力が高まる。これらのことから第六に、受験競争のありようは選抜システムによって規定されている「受験競争の社会的構成」が確認された。

これらの知見は、選抜システムの改革や評価は、理想的なモデルをもとにするのではなく、システムがどのような生徒にどのような影響を与えているのかという現実的な調査にもとづいて行う必要性を示唆するものである。

KEY WORDS

日韓比較社会学 (comparative sociology of Japan and Korea)

中学生 (middle school students)

競争意識 (competitive consciousness)

選抜システム (entrance examination system)

受験競争の社会的構成 (social construction of entrance examination competition)

1. は じ め に

日本では、これまで過度の受験競争が問題とされ、いかにしてそれを緩和するかが教育改革の柱の一つであった。たとえば、1997年に出された中教審の第二次答申においても、「大学・高等学校の入学者選抜の改善」という章が設けられ、過度の受験競争の弊害と、高校入試改革の必要性を訴えている。そして実際、このような認識を基調としたさまざまな入試制度改革が進行している⁽¹⁾。

一方、韓国においても受験競争の激化は社会問題化しており、その弊害を除去すべく、さまざまな対策がなされている。ソウル市をはじめとした大都市においては、1974年より高校の学

* 生徒指導総合講座

校間格差の撤廃と受験競争の沈静化を目標として、一般系高校平準化が導入されるといった施策がなされ⁽²⁾、さらに、ソウル市では1998年度以降入学試験が廃止され、中学校の内申のみで選抜が行われている。

このように、高校受験競争については日韓両国で主題化され、それぞれのやり方で対策がなされてきた。では、それぞれの国における高校受験をめぐる競争は、現在どのようなものとなっているのだろうか。「競争が生起する構造」のありようによって、競争が生徒に与える影響は異なっているとするとすれば (Coloman 1961)、それぞれの国の「競争が生起する構造」はどのようなもので、生徒たちにそれぞれどのような影響をあたえているのだろうか。

本研究は、上記のような問題関心から、日韓の中学生たちの高校進学を対象として両国の受験競争の実態と構造を明らかにすることを主題とする⁽³⁾。

2. 先行研究の検討と課題の設定

受験競争にかかわる諸研究として、第一に、日本の高校受験に関するもの、第二に、競争自体を考察したもの、第三に、受験競争を引き起こす構造に注目したものの三つを検討しよう。

まず、日本の高校受験をめぐることは、これまで主として次のような説明がなされてきた。すなわち、「一元的能力主義」(乾 1990)によって特徴づけられる日本の教育選抜システムのもとで、中学生たちはゼロサムゲームである選抜過程において「個人主義的敵対的競争」(久富 1985)状態にあり、その競争は、大勢が同一の目標に向かって一斉に走り出す「同調的競争」であり、家族ぐるみの集団的な競争となっている(山村 1984)といった説明である。

しかし、従来の研究に対して、「競争・選抜という観点が強調されすぎてきたのではないか」(吉本 1991)といった反省や、「『試験地獄』を自明の前提として」(菊池 1992)きたことに對する疑問も提出されている。つまり、競争を前提とせず、競争のありよう自体を問い直す必要があるのである。

次に、競争自体を考察した研究を取りあげよう。競争は一般的に「一方の当事者が目標を達成すれば、他方はおのずから目標の達成が不可能になる、そのような意味での相互阻害的な事態」とされる(安田 1981)。確かに、このようなゼロサムゲームとして受験もとらえることができる。なぜなら、資格試験とは違って入学定員が定まっており、一人の合格は他の一人の不合格を意味しているからである(久富 1985, 1993)。しかし、太田も指摘するように、たとえば、競争のフィールドが組織のような一定範囲内に限定される場合と、一般社会のように外部に開かれている場合とでは、ゼロサム状態に関する人々の認知は異なってくる(太田 1996)。この場合、ゼロサムゲームであったとしても、ゼロサム状態に関する認知の違いによって、引き起こされる競争のありようは異なることになる。この点についてコーンは、ゼロサムゲームを「構造的な競争」と呼び、構造的な競争によって引き起こされる状態(態度や意識)を「意図的な競争」として区別するとともに、「意図的な競争」のありようは、「構造的な競争の枠組みによって変化させられてもいる」ことを指摘している(コーン 1994)。それゆえ、受験をゼロサムゲームとしてとらえるだけでは不十分であり、「意図的な競争」としての競争状態の考察と同時に、そのような状態を引き起こす「構造的枠組み」の考察が必要なのである⁽⁴⁾。

最後に、競争を引き起こす構造的枠組みとして選抜システムに着目した研究を取りあげよう。竹内は、すべての学校が序列化されている「傾斜的選抜システム」によって選抜のまなざしは

ほとんどすべての者にそそがれ、自分なりの目標に向けて焚きつけられていると主張している(竹内 1995)。しかし、実際に競争が全体的に浸透しているのかどうかを確かめる必要があるだろう。なぜなら、全国区的な大学受験と違い、高校受験の状況は地域によって異なっているため、傾斜的選抜システムにもヴァリエーションが存在する可能性があるからである。その点に焦点を当てたものとして、次の研究がある⁽⁶⁾。藤田は、選抜システムのありようによって、形作られる競争のフィールドが異なっている可能性があることを見出し、中学生の競争意識が選抜システムのありようによって規定されるという「受験競争の社会的構成説」を提出している(藤田 1996)。しかし、仮説の提出にとどまっておらず実証されてはいない。そのため、選抜システムと競争の状態の関係を実証的に検討する必要がある。その点、われわれの調査は日韓という国の違いとともに、それぞれの国における地域間の違いをも視野に入れており、好都合であると考えられる。

以上の検討から、本章では、以下の三つの課題を設定する。第一に、両国の中学生たちは受験を競争だと意識しているのかどうか、「意図的な競争」の状態を確かめることである。第二に、受験を競争として意識するという「意図的な競争」が、どのような「構造の枠組み」と関連しているのかを検討するため、「構造の枠組み」として選抜システムに着目し、競争意識と選抜システムとの関係を考察することである。第三に、競争意識以外の側面からも両国における「意図的な競争」のありようを探究し、それらと選抜システムとの関係を探究することである。これらの課題に取り組むことによって、本研究の主題に接近していくことにしよう。

3. 各地域の選抜システム

3. 1 各地域の選抜システムの概要

分析に先立ち、調査対象である東京都・群馬県、ソウル市・江原道の各地域における高等学校への選抜システムを概観するとともに、それぞれの地域の選抜システムの特徴を整理しておこう。なお、以下に示す選抜システムは、調査対象の中学生たちが受験した2000年度入試のものである。

(1)日本の教育システム

①東京都の選抜システム

東京都の高校入試制度は次の通りである⁽⁶⁾。東京都も例に漏れず、公立高校は入学難易度や大学進学率などによってランクづけされている。公立高校入試は、一般入試の場合、内申と学力検査によって合否が判定される⁽⁷⁾。一方、私立高校もまたランクづけがなされているが、他の多くの道府県とは異なり、公立高校の下にランクづけされているのではなく、一部の私立高校は公立高校よりも上に位置しており、公立高校と同等に位置づくものも少なくない。私立高校入試は、一般入試の場合、入学試験実施日が3日間程度に分散しており、複数の高校を受験することが可能である。

②群馬県の選抜システム

群馬県の高校入試制度を概観しよう⁽⁸⁾。公立高校はやはり序列化されており、一般入試は、内申と学力検査によって合否が判定されるが、定員を二つに分け、学力検査と内申書の比率の異なった選抜をする高校もある⁽⁹⁾。私立高校も数校存在しているが、公立高校よりも下に序列づけ

られていることが多く、東京都に比べ受験機会も限られている。

(2) 韓国教育システム

① ソウル市の選抜システム

ソウル市の高校入学は次のように行われている⁽¹⁰⁾。1974年より、高校の学校間格差の撤廃と受験競争の沈静化を目標として、一般系高校平準化が導入された。それによって、一般系高校間には、進学校と非進学校などのように、進学実績の相違や入学難易度によるランクづけが基本的には存在しない⁽¹¹⁾。しかしながら、農業、工業、商業、水産などの実業系高校が一般系高校の下に位置づけられており、大別すると一般系と実業系という二つの序列があると考えられる⁽¹²⁾。その選抜にあたっては、1998年度以降入学試験が廃止され、中学校の内申のみで選抜が行われている。

② 江原道の選抜システム

江原道の高校入学制度は次の通りである⁽¹³⁾。江原道では、ソウル市のような平準化措置が行われておらず、高校ごとに筆記試験などによって入学者選抜を行っている⁽¹⁴⁾。入試は、実業系高校、一般系高校の順にそれぞれ同一日に行われる。非平準化地域であるため、一般系高校と実業系高校の間だけではなく、一般系高校間にも入学難易度の格差が存在している。新聞報道によれば、2001年度入試から行われる筆記試験の廃止を先取りし、2000年度入試においても内申のみの選抜が実施される(1999年4月23日付 江原道民日報)。しかし、内申書のみの選抜は選抜度のそれほど高くない高校を中心として行われ、選抜度の高い高校では従来どおり筆記試験が課されたようである。

3. 2 各地域の選抜システムの特徴

前節で概観した各地域の選抜システムは、競争との関連において、どのように整理することができるだろうか。

森は、競争が激しくなる条件として、めざされる資源の稀少性、当事者たちの直接的対面といった条件を挙げている(森 1993)。進学する高校という資源を稀少にする選抜システムの要因として、高校の階層構造と受験機会があるだろう。階層構造によって上位に位置づけられた高校に稀少価値が生じることになり、また、受験機会が限られることによって、一回のチャンスの稀少性が高まることになるからである。一方、内申書という入試方法は、当事者たちの直接的対面を引き起こす選抜システムの要因としてとらえることができる。つまり、内申書を重視することは、一つの学校内での相対的位置を上昇させる必要性を高めることによって、学校内で直接的に対面している人間を競争相手にすることにつながると考えられるのである。

これらの三つの要因によって各地域の選抜システムの特徴を整理してみよう。

第一に、高校の階層構造という要因について。ソウル市では、平準化措置によって一般系では原則的に階層構造がなく、実業系と一般系の間の階層構造が相対的に大きなものとなっている。それに対し東京都の場合は、高校の数も多く、公立高校と私立高校が入れ子状になって、複雑で細かい階層構造をなしている。群馬県と江原道の場合は、それらの中間だと考えられるだろう。

第二に、受験機会という要因について。東京都の場合は、特に私立高校の数の多さから、受験機会が他の府県に比べて多い。それに対し、群馬県は相対的に限定されている。また、ソウ

ル市と江原道における受験機会は、基本的に一回である。

第三に、入試方法という要因について。ソウル市では内申書のみの選抜であり、その他の地域は、内申書と筆記試験を併用するという形態である。しかし、江原道の一部では内申書のみの選抜も行われており、東京都では内申書の重要性が相対的に低い私立高校が多く存在するため、筆記試験の比重が高い場合も多い。

これら三つの要因から整理した各地域の選抜システムの特徴を、次の表1に示した。

表1 各地域の選抜システムの特徴

		階層構造	受験機会	入試方法
日本	東京都	多	多	併用／筆記
	群馬県	中	中	併用
韓国	ソウル市	少	少	内申のみ
	江原道	中	少	併用／内申のみ

それぞれの地域の選抜システムのこのような特徴と関連させながら、次節以降で、日韓の中学生たちの「意図的な競争」について考察していくことにする。

4. 選抜システムと競争意識

4. 1 全体的な競争意識

日韓の中学生たちは、高校受験を競争としてとらえているのだろうか。そのことについて、「高校進学は、同じ学校の友だちとの競争だと感じていた」という設問を用いて確かめよう。

日本では、競争だと感じていた割合は21.1%、韓国では35.9%であった。競争意識を持つ割合は、いずれの国においても少数派である。つまり、両国の中学生はともに、必ずしも受験を競争としてはとらえてはならず、この側面から見れば、従来の「受験＝競争」という図式は必ずしもあてはまらないと言えるだろう。とはいえ、日本と韓国を比べると韓国において競争意識を抱く割合が多く ($p=.000$: χ^2 検定)、日本よりも韓国のほうが競争的な雰囲気強いと言えるだろう。

次に、中学3年生になってから「友だちとお互いに勉強を教えあった」ことがあったかどうかを尋ねた設問に対しては、日本では60.8%、韓国では68.4%の生徒がそれぞれ肯定的に回答している。日韓とも、受験に至る過程において友だちと協力的な関係にあったと回答する生徒のほうが多数派である。競争意識を抱く者が少数派であることともあわせると、必ずしも「敵対的」であったり、「同調的」であったりするような競争状態のなかにあるとは言えない両国の中学生の姿が浮かび上がってくる。

また、日本の受験競争が家族ぐるみの競争であると指摘されてきた点を検討するため、競争意識に関する設問と、保護者が「勉強しろとよく言う」かどうか（保護者の勉強圧力）を尋ねた設問をクロスさせた。その結果を示したのが表2である。

表から分かるように、有意差が認められるのは韓国だけであり、保護者の勉強圧力のあるほうが、競争意識を抱く割合が高くなっている。しかし、競争意識と保護者の勉強圧力の関係に

表2 競争意識と保護者の勉強への圧力の関係
(単位=%)

		保護者の勉強圧力		有意水準
		あり	なし	
日本	受験は競争だ肯定	22.9	18.9	
	n	567	502	
韓国	受験は競争だ肯定	40.7	29.4	***
	n	570	425	

(*** p < .001 : χ^2 検定)

対して階層が影響している可能性がある。そこで、次の表3に示したように、競争意識と保護者の勉強圧力の関係を父親の学歴で統制してみた。すると、父親の学歴が中学卒の場合を除いて有意差が確認され、高校卒以上では学歴階層にかかわりなく、やはり韓国では勉強圧力のあ
るほうが競争意識を抱く割合が多いという関係が見られるのである。

表3 父学歴別の競争意識と保護者の勉強への圧力の関係
(単位=%)

			保護者の勉強圧力		有意水準
			あり	なし	
日本	中学校以下	受験は競争だ肯定	9.5	9.1	
		n	19	20	
	高校	受験は競争だ肯定	21.2	16.8	
		n	146	137	
	短大以上	受験は競争だ肯定	25.9	20.9	
		n	263	215	
韓国	中学校以下	受験は競争だ肯定	32.2	32.7	
		n	59	52	
	高校	受験は競争だ肯定	39.6	28.9	*
		n	230	197	
	短大以上	受験は競争だ肯定	46.2	32.0	**
		n	223	128	

(** p < .01, * p < .05 : χ^2 検定)

これらのことから、家族ぐるみの競争というイメージは、日本よりもむしろ韓国のほうに当てはまる可能性が高いと考えられるのである。

4. 2 選抜システムと競争意識

必ずしもその割合は高くはないが、受験を競争としてとらえる者がいないわけではない。受験において他者と競い合っているという意識（「意図的な競争」）は、どのような仕組み（「競争の枠組み」）と関連しているのだろうか。先に検討したそれぞれの地域の選抜システムの特徴が中学生の競争に関する意識に対して影響を及ぼすならば、それはどのようなものだと考えられるだろうか。

①予測される競争意識

まず、韓国について検討したい。第一に、高校の階層構造の違いから、ソウル市では一般系高校に進学する場合、高校の序列を意識する必要がなく、序列の上位に位置づく高校を目指す競争が低減される一方、江原道A市では競争が持続することになるだろう。それゆえ、競争意識はソウル市よりもA市において高くなることが予想される。

第二に、入試方法については、高校進学に際してソウル市では内申書のみの選抜であるのに対し、A市では内申書と筆記試験が課され、内申点を筆記試験でカバーすることが可能になる。それゆえ、ソウル市のほうが内申に対して敏感になり、競争意識を高めることになると予想される。しかし、平準化措置のもとでは、一定水準以上の内申点をとったならば、序列のない一般系高校への進学がいわば保証されることになるため、一般系と実業系という序列のはざまあたりに位置づく生徒以外については、競争意識は必ずしも高くない可能性もある。

このように、韓国の場合、高校の階層構造と入試方法という選抜システムに関わる二つの側面から相反する予測が立てられる。

次に、日本について検討しよう。第一に、高校の格差構造の違いである。群馬県では、東京都に比べて高校数が相対的に少なく⁽¹⁵⁾、公立高校を中心とした高校の階層構造が明確である。つまり、群馬県では、高校の格差構造に対応したいわゆる「輪切り」の幅が太く、序列が可視的で、安定しているのである。それは、一つの中学校から同一の高校を受験する人数も多いということでもある。それゆえ、目標が同一の生徒の比率が高くなることによって、中学校内部での競争が志望校の可否に直接結びつきやすくなる「学校内に閉じた競争」（藤田 1996）となると考えられる⁽¹⁶⁾。それに対し、東京都では高校の数が非常に多いとともに、私立高校のステイタスも高く、公立高校と私立高校が入れ子状に細かな階層構造をなしている⁽¹⁷⁾。つまり、「輪切り」の輪の数が多く、幅も狭くなるのである⁽¹⁸⁾。そのため、一つの中学校から同一の高校を受験する人数はかなり少なくなり⁽¹⁹⁾、中学校内部での競争が志望校の可否に直接結びつく可能性も低くなる。その結果、東京都の受験競争は、中学生たちの合格を脅かすものが学校内の生徒たちではなく、学校外に広く散在する中学生集団である「学校外に開いた競争」（藤田 1996）となると考えられる。このような競争のフィールドの違いから、群馬県は学校内でのゼロサム状態が高まって競争意識が強まるのに対し、東京都は学校内でのゼロサム状態が緩和されて競争意識が弱まることが予想される。

第二に、受験機会については、群馬県よりも東京都の方が数が多い⁽²⁰⁾。それゆえ、群馬県よりも東京都において競争意識が低減される可能性がある。第三に、入試方法については両地域

とも内申書と筆記試験の併用型であって大きな違いはない。とはいえ、東京都の場合は、必ずしも内申書を必要としない私立高校の比重が高い。それゆえ、やはり東京都の方が競争意識が低くなることが予想される。

このように、日本についてはいずれの点からも東京都よりも群馬県B市における競争意識の方が高くなるという予測が立てられる。

②競争意識の検証

前項で予測された各地域の競争意識について確かめてみよう。

表4 競争意識に関する地域間比較

(単位=%)

		東京都	群馬県	有意水準
日本	受験は競争だ肯定	14.7	27.6	***
	n	550	539	
		ソウル市	江原道	有意水準
韓国	受験は競争だ肯定	29.8	41.6	***
	n	516	538	

(*** $p < .001$: χ^2 検定)

表4に明らかなように、両国とも競争意識と地域との関係が有意である。予測されたとおり、韓国ではソウル市よりも江原道A市において、日本では東京都よりも群馬県B市において、それぞれ競争意識を抱く割合が高いという結果になった。ソウル市では、内申書のみを用いる入試方法の効果が、平準化措置による進学保証効果によって相殺され、江原道A市よりも競争意識を抱く割合が低くなったと考えることができるだろう。

しかし、上記の結果は、地域によって学歴観や家庭環境、教育アスピレーションなどが異なっていることから生じている可能性がある。そこで、学歴観(「どんな学校を出たかによって人生がほとんど決まってしまう」)、家庭における勉強への圧力(「勉強しろとよく言う」)といった点と、教育アスピレーションについて地域間比較をしてみよう。

表5 学歴観と家庭環境に関する地域間比較

(単位=%)

	日本		韓国	
	東京都	群馬県	ソウル市	江原道
出身校で人生決定肯定	33.2	35.7	57.2	53.1
n	552	538	474	507
保護者の勉強圧力あり	50.4	56.0	57.3	57.5
n	544	532	489	508

表5は学歴観と保護者による勉強への圧力について地域間比較をしたものである。両国ともいずれの設問にも有意な差は見られない。また、教育アスピレーションについては、韓国の場合、ソウル市の平均値は16.04年 (n=489, S.D.=1.23), 江原道A市の平均値は16.04年 (n=497, S.D.=1.42) であり, t検定の結果, その差は有意ではない (p=.930)。日本の場合, 東京都の平均値は14.85年 (n=531, S.D.=1.53), 群馬県B市の平均値は14.87年 (n=532, S.D.=1.62) であり, t検定の結果, その差は有意ではない (p=.798)。いずれの点においても両地域間に有意な違いは見られないため, 競争意識の違いは, これらの点の相違から生じているのではなく, 選抜システムの効果である可能性が高い。

③競争意識を抱く生徒

では, 各地域においてどのような生徒が競争意識を特に抱くことになるのだろうか。それぞれの地域において, 選抜システムの特徴に対応した競争意識の分布が見られるとすれば, 選抜システムが「競争の枠組み」として機能していることがより確かになるだろう。そこでまず, 各地域の選抜システムの特徴から, どういった生徒たちに競争意識を持つ割合が高くなる可能性があるかを考察しよう。

韓国については, 次のように考えられる。ソウル市では, 一般系と実業系の間に大きな格差が存在している。そのような高校階層の特徴から, 一般系か実業系かという境界あたりに位置づく, 学業成績の中から中の下のあたりの生徒たちに競争意識をもつ割合が高くなることが予想される。それに対し江原道A市では, 一般系の間に序列が存在すると同時に, 一般系と実業系という格差も存在する。教育アスピレーション水準が全般的に高い韓国では⁽²¹⁾, 大学進学実績のより高い一般系高校へと進むことが切実な問題となろう。それによって, A市では学業成績の中位以上の一般系高校へ進学する層と同時に, 一般系と実業系の分かれ目に位置する生徒たちにも選抜圧力がかかり, それらの生徒たちに競争意識を抱く割合が高くなることが予想される。

日本についてはどうだろうか。東京都と群馬県とも, 密度の違いはあるが, 階層構造が上位から下位までまんべんなく存在している点で共通している。そのため, 両地域とも競争意識がほぼ均等に分布している可能性がある。

これらの点を確かめるため, 学業成績別の競争意識の割合を地域別に調べてみたのが, 表6である。なお, 太字の数値は最大値を示している。

表6 競争意識と学業成績の関係

(単位=%)

		学業成績					有意水準
		下位	中の下	中位	中の上	上位	
日本	東京都	11.1	11.2	19.3	10.2	26.3	*
	群馬県	22.3	28.1	32.4	18.9	32.0	
韓国	ソウル市	26.3	33.3	31.9	26.0	32.2	
	江原道	20.5	30.9	52.0	41.4	46.2	***

(*** p < .001, * p < .05: χ^2 検定)

表6から、学業成績によって競争意識を抱く割合が地域ごとに異なっていることが分かる。ソウル市に関しては、学業成績と競争意識との関係は有意ではないため、必ずしも予測どおりとは言えないが、学業成績が中の下の層で割合の最大値が見られる。それに対し、江原道A市では、学業成績と競争意識との関係が有意であり、学業成績の中位において最大値が見られ、学業成績の上位層でも割合が高くなっている。中の下の層であまり割合が高くはない点を除き、ほぼ予測されたとおりの結果だと言えるだろう。

群馬県B市については、競争意識を抱く割合の最大値が学業成績の中位層に見られるが、競争意識との関係は有意ではなく、予測とほぼ一致する結果だと考えられる。それに対し、東京都では、予測に反して有意差が見られ、上位層において割合が最大になるという結果になった。これは、選抜度の高い私立高校の存在が影響しているのかもしれない。

以上のように、学業成績と競争意識との関係は、すべてが予測通りという結果ではなかったが、おおむね選抜システムのありように対応した動きをしていると言えるだろう⁽²²⁾。つまり、選抜システムは、生徒たちの競争意識を規定する「競争の枠組み」として機能している可能性がさらに高まったと考えられるのである。

5. 受験をめぐる意識と行動

5. 1 各地域における受験をめぐる意識と行動

前節では、各地域の選抜システムの特徴と競争意識との関係を検討した。ここでは、競争の状態と選抜システムとの関係をさらに検討するため、次の三つの要因から競争の状態を多面的にとらえていくことにしたい。

第一は、競争一般に関わる要因である。コーンは、競争がもたらすものとして不安感を挙げている(コーン 1994)。また、竹内は、日本の高校生はイギリスの高校生に比べ不安感に苦しめられていると主張しており(竹内 1995)、藤田は、中学生が受験体制へと自ら包絡していく背景に不安感があることを指摘している(藤田 1994)。そこで、競争の状態を不安感という要因からとらえることにする。

第二は、入試方法に関わる要因である。先に指摘したように、競争が激しくなる条件の一つとして当事者たちの直接的対面という条件がある。その条件を入試に当てはめるならば、一つの学校のなかで直接的に対面している人間が相互に競争相手になる場合に競争が激しくなることになろう。そのような状況を作り出す装置として、内申書が挙げられる。そこで、内申書への気遣いという要因から競争の状態を検討しよう。

第三は、競争に関わる行為という要因である。受験競争が激しいならば、相手に先んじるために学習する時間も多くなる可能性がある。上記の二点のような意識に関わる要因からだけではなく、競争状態を学習時間という行為からとらえることにしたい。

以上の三つの要因から競争の状態をとらえ、それらの要因と選抜システムとの関係について検討する。そのため、上記の三点と各地域の選抜システムとの間にはどのような関係が予測されるか考察しておこう。

まず、競争に伴う不安感については競争意識の場合と同様の理由から、韓国ではソウル市よりも江原道A市において、日本では東京都よりも群馬県B市において、それぞれ高くなることが予測される。次に、内申書への気遣いについて、韓国では内申書のみで選抜が行われるソウ

ル市において高まると考えられる。日本では、両地域とも併用型であるが、内申書があまり重視されない私立高校入試の比率の高い東京において低くなることが予想される。最後に、学習時間については、競争意識が高く、おそらく不安感も高いと考えられる、江原道A市と群馬県B市において長くなると考えられる。

以下、不安感については「希望する高校にいけないかもしれないと不安になった」という設問、内申書への気遣いについては、これまでの中学校生活で「内申書（調査書）のことを気にしていた」かどうかを尋ねた設問、学習時間については、家庭での学習時間をそれぞれ用いて、上記の予測を確かめていく。

表 7 不安感と内申書への気遣いに関する地域間比較

(単位=%)

	日本		有意水準	韓国		有意水準
	東京都	群馬県B市		ソウル市	江原道A市	
入試不安感じた	75.4	83.0	**	37.5	67.4	***
n	553	540		514	537	
内申書気にした	66.4	55.7	***	82.9	74.1	***
n	551	539		516	537	

(*** $p < .001$, ** $p < .01$: χ^2 検定)

表 7 は、不安感と内申書への気遣いと、地域とをクロス集計したものである。不安感と地域との関係は両国とも有意であり、予測されたとおり、韓国では江原道、日本では群馬県の方が不安を感じる割合が高くなっている⁽²³⁾。一方、内申書への気遣いと地域との関係は両国とも有意であるが、韓国については予測通りソウル市において割合が高いのに対し、日本では予測に反して東京都の割合が高いという結果になった。

では、学習時間についてはどうだろうか。韓国の場合、ソウル市が99.79分($n=478$, S.D.=85.64)、江原道B市が132.16分($n=487$, S.D.=95.67)となり、t検定の結果、その差は有意であった($p=.000$)。日本の場合、東京都が98.04分($n=524$, S.D.=80.20)、群馬県B市が139.74分($n=531$, S.D.=75.25)となり、t検定の結果、その差は有意であった($p=.000$)。つまり、予測されたとおり、江原道A市と群馬県B市の家庭学習時間が長いという結果になったのである。

このように、東京都に関する一部の結果を除き、ほぼ予想通りの結果を得ることができた。選抜システムは、競争意識以外の側面においても、競争の状態に影響を及ぼしていると考えられるのである。

6. 攪乱要因としての推薦入試 —日本の地域間比較—

これまで見てきたことから、日韓両国とも、競争の状態はそれぞれの地域の選抜システムの特徴と対応していると考えられるだろう。しかし、日本では以下の二点において予測

と異なった結果が得られた。すなわち、第一に、東京都では競争意識を抱く割合が均等に分布するという予測に対して、成績の上位層に特に多かったこと、第二に、東京都では内申書を気遣う割合が群馬県B市よりも低いという予測に対して、逆に高かったことの二点である。東京都の選抜システムには、予測を攪乱するような別の要因があるのだろうか。

東京都の中学生たちに内申書を気にさせている原因の一つとして考えられるのは、近年その数が多くなっている推薦入試である。少子化によって生徒数を確保したい私立高校はもちろん、1995年度からは都立高校においても推薦入試が導入され、年々その枠は拡大している。もちろん群馬県においても、事実上、県立高校での推薦入試が行われている。そこで、東京都と群馬県の推薦入試の異同について検討し、予測が攪乱された東京都の状況について追究しよう。

6. 1 両地域における推薦入試制度の概要

分析に先立って東京都と群馬県における推薦入試制度を概観しておこう。

東京都の公立高校の推薦入試の場合、学力検査がなく、面接、作文などと内申書によって合否が判定される。推薦入試のほうに先に実施されるため、推薦入試で不合格になった生徒も、一般入試を受けることができる。私立高校の場合、推薦入試は85.6%の高校で実施されている。推薦の形態は各高校によって異なり、複雑な様相を呈しているが、基本的には内申書が基準になることが多い。

群馬県においては、実質的な推薦入試は前期選抜として行われている。前期選抜は、内申書と面接、場合によってはそれに作文などが加えられて合否が判定され、普通科の場合、定員の2割から3割程度の枠が設定されている。私立高校の推薦入試は、東京都と同様に内申書が基準になることが多い。

6. 2 両地域における推薦入試の利用者

前項で概観した両地域の推薦入試には、どのような点に違いが見られるのだろうか。その点について、推薦入試を利用する生徒に着目して検討する。

まず、東京都と群馬県B市において推薦入試を利用した生徒の割合を比較してみよう。進学予定の高校でどのような入試を受けたかを尋ねた設問の回答によれば、東京都では一般入試が62.9%、推薦入試が37.1% ($n=547$)、同様に群馬県では64.7%、35.3% ($n=530$) であり、 χ^2 検定の結果、利用比率と地域との関係は有意ではない ($p=.532$)。つまり、両地域の推薦入試の利用者の割合には大きな違いがないのである。

次に、推薦入試の利用と、進学先の学校タイプとの関係を調べよう。学校タイプとしては、公立高校と私立高校という違いと、普通科と専門学科という違いが挙げられる。そこで、入試方法と学校タイプとの関係を地域別に調べてみたのが表8である。

公立と私立という学校タイプの違いについては、両地域とも有意な関係が見られ、公立で一般入試が多く、私立で推薦入試が多いという結果になった。一方、普通科か専門学科かという学校タイプと入試方法の関係については、群馬県においてのみ有意差が見られ、普通科で一般入試が多く、専門学科で推薦入試が多いという結果になった。

群馬県の私立高校は、高校の階層構造において公立高校の下に位置づけられることが多い。それに対して、東京の私立高校は公立高校と同等か、それ以上のステータスを持つものも少なくない。また、両地域に共通して、専門学科が高校の階層構造の下位に位置づけられることが

表 8 地域別・入試方法と学校タイプの関係
(単位=%)

		一般入試	推薦入試	有意水準
群馬県 B 市	公立	91.4	66.1	***
	私立	8.6	33.9	
	n	326	177	
東京都	公立	72.5	48.7	***
	私立	27.5	51.3	
	n	331	195	
群馬県 B 市	普通科	73.3	59.4	**
	専門学科	26.7	40.6	
	n	285	155	
東京都	普通科	83.8	84.0	
	専門学科	16.2	16.0	
	n	278	162	

(*** $p < .001$, ** $p < .01$: χ^2 検定)

多い。これらのことから、東京都と群馬県では推薦入試の利用者の学業成績が異なっている可能性が考えられる。その点について確かめるため、推薦入試の利用率と地域との関係を、学業成績別に検討してみよう。

表 9 学業成績別・入試方法と地域の関係

		群馬県 B 市	東京都	有意水準
上位	一般入試	72.5	59.4	*
	推薦入試	27.5	40.6	
	n	138	155	
中位	一般入試	64.3	66.1	
	推薦入試	35.7	33.9	
	n	185	186	
下位	一般入試	59.1	62.3	
	推薦入試	40.9	37.7	
	n	203	204	

(* $p < .05$: χ^2 検定)

表9が示すように、成績の中・下位層においては有意な差はないが、上位層においては有意差が見られ、東京都のほうが群馬県よりも推薦入試を利用した割合が高い。また、表を縦に読むと、群馬県では成績が下位になるに従って推薦入試を利用する割合が増えるのに対し、東京都では成績の中位層に比べ、上位層と下位層において利用する割合が高くなっていることが分かる。

このように、推薦入試の利用者という点から東京都と群馬県を比較すると、成績下位者に比重をおいた推薦入試が行われている群馬県と、成績下位者と成績上位者の両方に比重をおいた推薦入試が行われている東京都という違いが見えてくるのである。

6. 3 推薦入試の新たな動きとそのインパクト

前項の分析から、東京都と群馬県における推薦入試の違いが見出された。その違いは、次のようにとらえることができるのではないだろうか。

中村は、大学入試における推薦入試を検討し、高等教育がマス段階に達したことから、必ずしもエリートとはいえない学生を受け入れるようになった「マス選抜」の状況下で、大学入試における推薦入学が公認されたことを指摘している(中村 1996)。中村の指摘する推薦入試は、必ずしも学業成績が高いとはいえない層を対象としたものである。それを高校入試の場合に援用すれば、群馬県における推薦入試は「マス選抜」型の推薦入試としてとらえることができるだろう。それに対し、東京都ではマス選抜型に加え、成績の高い者を青田刈り的に取り込もうとする推薦入試が増加してきていると考えられる。それは、マス段階を越えたユニバーサル段階において、入学者を確保しようとする新しい動きとしてとらえることができるだろう。そこで、学業成績の上位層をターゲットとした推薦入試を、ここでは「ユニバーサル選抜型」と呼ぶことにしよう。

では、このような動きは、本当に新たな動きと言えるのだろうか。その点を確認するため、このような動きがどういった高校によって生み出されているのかを検討しよう。

表10 地域別・学校タイプ別・入試方法と学業成績の関係
(単位=%)

			上位	中位	下位	有意水準
群馬県B市	公立	一般入試	74.2	68.6	72.9	
		推薦入試	25.8	31.4	27.1	
		n	124	159	129	
	私立	一般入試	33.3	36.4	28.8	
		推薦入試	66.7	63.6	71.2	
		n	6	22	59	
東京都	公立	一般入試	61.1	75.2	78.0	*
		推薦入試	38.9	24.8	22.0	
		n	108	117	109	
	私立	一般入試	58.1	50.7	39.5	
		推薦入試	41.9	49.3	60.5	
		n	43	67	81	

(* $p < .05$: χ^2 検定)

表10は、推薦入試と学業成績のクロス表を公立か私立かという学校タイプで統制したものである。東京都の公立においてのみ有意差が見られ、学業成績が上位になるほど推薦入試を利用した割合が増えている。これは、都立高校の普通科において最近になって導入されはじめた推薦入試が、成績上位者に比重をおいたものとなっていることを示している。やはり、従来の推薦入試とは異なる新たな動きとしてとらえることが妥当であると言えるだろう。学力に偏った選抜方法を脱して、選抜に多面的な評価を持ちこむという理念から導入された推薦入試は、中澤も指摘するように、必ずしも意図通りの結果を導くものとなっていないことになろう（中澤2000）。

東京都の選抜システムにおけるこのような新しい動きをも視野に入れるならば、東京都に関する二つの予測が外れたことは、競争の状態が選抜システムによって規定されるというこれまでの仮説を逆に支持することになると考えられる。なぜなら、競争意識を抱く割合が学業成績の上位層において高かったことは、選抜度の高い私立高校の存在とともに、学業成績の上位者をターゲットとした推薦入試という選抜システムの影響であるとも考えられ、また、内申書を気遣う割合が群馬県よりも多かったことは、新しい推薦入試の導入という選抜システムの効果だと考えられるからである⁽²⁴⁾。

その点について確認するため、内申書への気遣いにおいて、推薦入試の新しい動きがどういった生徒たちにインパクトを与えているのかを確かめておこう。おそらく、東京都ではユニバーサル選抜型推薦入試を利用する成績の上位層において内申書を気にする割合が高く、群馬県ではそうならないという違いが出てくることが予測される。

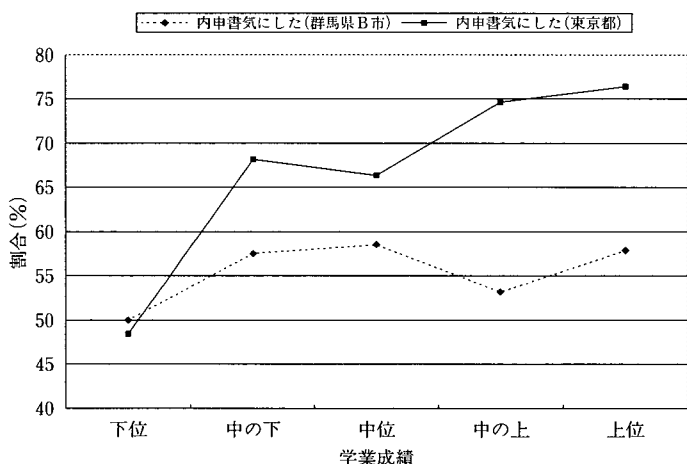


図1 内申書への気遣いと学業成績の関係

への気遣いが中の下の層で多くなり、中位まで横這いで、中の上から上位に向けて上昇するという動きが見られる。これはほぼ予測どおりの結果だと言える⁽²⁵⁾。ここに、「ユニバーサル選抜型」推薦入試の導入という選抜システムの影響を見て取ることができるだろう。

図1は、内申書を気遣う割合を学業成績別にグラフ化したものである。群馬県では内申書への気遣いと学業成績との関係は有意ではなく ($p=.681: \chi^2$ 検定)、いずれの学業成績層においても内申書を気遣う割合に大きな違いは見られない。これは、先に指摘した「学校内に閉じた競争」の効果だと考えられるだろう。

それに対し東京都では、両者の関係が有意であり ($p=.002: \chi^2$ 検定)、内申書

7. まとめと考察

これまでの分析から、選抜システムによって、そこで生起する受験競争のありようが規定されていると考えることができるだろう。すなわち、日本と韓国の双方において受験競争は社会的に構成されているのである。最後に、本稿で得られた知見をまとめ、そこからどのような示唆を得ることができるか考察しよう。

7. 1 本稿の知見のまとめ

本稿の知見は、以下の六点にまとめることができよう。

第一に、競争意識を抱く者は両国とも少数派であり、中学生たちの意識は必ずしも「受験＝競争」という図式でとらえることはできない。また、第二に、家族ぐるみの受験競争というイメージは、日本よりもむしろ韓国に対してあてはまる。しかし第三に、両国とも競争意識を抱く者が存在しないわけではなく、その割合や分布は、選抜システムの特徴によって規定されている。また第四に、競争の状態を不安感や内申書への気遣いといった意識面と、学習時間という行為面からとらえた場合、やはりそのありようは両国とも選抜システムの特徴と対応している。さらに第五に、東京都の競争の状態については、「ユニバーサル選抜型」推薦入試の導入という選抜システムの要因を加えると、より説明力が高まる。これらのことから第六に、受験競争のありようは選抜システムによって規定されている「受験競争の社会的構成」が確認された。

では、これらの知見から両国の「競争が生起する構造」はどのようなもので、生徒たちにそれぞれどのような影響をあたえていると考えられるだろうか。

7. 2 受験競争と選抜システム

まず、高校の階層構造や受験機会、入試方法といった要因の組み合わせが、それぞれの地域の全体的な競争の状態にどのような効果をもたらしているのかを考察しよう。

日韓ともに競争意識や不安感が高く、学習時間が多かったのは、群馬県B市と江原道A市である。両地域とも、高校の階層構造が上位から下位まで存在し、受験機会が限られており、内申書と筆記試験の併用型である点で共通している。このような選抜システムは、日本の多くの地域でも見られる「従来型」として把握できるだろう。

それに対し、ソウル市や東京都の選抜システムは、「従来型」の地域よりも、競争意識や不安感の低減と、学習時間の減少が見られる。それらの現象は、ソウル市では、平準化措置によって一般系高校には原則的に階層構造が見られないという特徴から、東京都では、階層構造の多層性と受験機会の多様性といった特徴から、それぞれもたらされていると考えられる。学習時間の減少といった問題⁽²⁶⁾についても、このような選抜システムの特徴との関係からとらえていく必要性が示唆される。

一方、ソウル市と東京都では、内申書を気遣う割合が「従来型」の地域よりも高い。ソウル市の場合は、内申書のみの選抜という入試方法がそこに影響しており、東京都の場合は、「ユニバーサル選抜型」推薦入試という入試方法が影響を与えていると言えるだろう。しかし、内申書を気遣うことは競争意識を高める効果があると考えられるにもかかわらず、両地域とも「従来型」の地域より競争意識を抱く割合が低い。その理由としては、高校の階層構造や受験機会

に関する両地域の特徴が影響を与えていることが考えられる。それゆえ、「従来型」の地域において入試方法だけを変更した場合には、ソウル市や東京都とは逆に、競争意識がさらに高まるという結果をもたらす可能性も否定できない。つまり、内申書重視か、それとも筆記試験重視かといった問題についても、選抜システムの特徴を構成する各要因を別々に検討するのではなく、それらの組み合わせとして検討する必要性が示唆されるのである。

次に、それぞれの地域の選抜システムが、どういった生徒たちに影響を与えているのかを考察しよう。

「従来型」の選抜システムである群馬県B市の場合、競争意識や内申書への気遣いが、いずれの学業成績の生徒たちにもほぼ同じような割合で見られた。それに対し、東京都の選抜システムのもとでは、成績の上位者においてそれらの割合が高くなっていた。

一方、韓国の場合、教育アスピレーションが全体的に高いこともあって、「従来型」の選抜システムである江原道A市では、群馬県B市と異なり、成績の中位以上の生徒たちの競争意識が高まる傾向が見られた。それに対し、ソウル市の平準化によってもたらされた高校の階層構造の特徴は、全体的な不安感を低減するものの、注23でも指摘したように、一般系と実業系のはざまに位置する生徒たちの不安感を高める効果を持っている。

このように、選抜システムとそれを取り巻く状況は、生徒たちに一様に選抜圧力をかけているのではない。それゆえ、入試制度改革に際して、生徒たちのどの層に圧力をかけることになるのかという視点の必要性が示唆されるのである。

最後に、選抜システムと受験競争の關係に着目することの意義について考察しよう。

受験競争の存在を前提にするのではなく、どういった「競争の枠組み」(＝選抜システム)が、どのような「意図的な競争」(＝競争の状態)を生み出しているのかという視点からとらえることは、これまで行われてきた入試制度改革や、現在行われている入試制度の多様化や自由化の評価、また、これから行う改革の模索において有効であろう。たとえば、ソウル市における平準化についても、不安感の全体的な低減の一方で、学業成績の低い層に不安感が維持されていたり、競争意識を低減する一方で、学習時間が少なくなっていたりするなど、多面的に見ていく必要がある。それゆえ、受験競争の弊害を除去しようという世論や、入学者を早めに確保したいという高校側の論理などに押し流された改革ではなく、生徒たちにとってどのような効果をもたらす改革が必要なのかという理念に立脚し、冷静な分析に基づいた改革が必要であることが示唆されるのである。

<注>

- (1) 1984年には、高校選抜制度も多様化・弾力化を基調として改正され、1990年代に少子化が進むにしたがってその動きが本格化した。また、1999年には前年の中等教育学校の導入に伴い、学校教育法施行規則が改正され、調査書と学力検査のいずれも用いず、他の方法で選抜することができるようになった。
- (2) 韓国における高校の平準化措置のありようについては、稲葉(1993)を参照。
- (3) 本研究のデータは、2000年の3月～5月にかけて、比較教育社会学会の行った日韓の中学生と高校生に対する質問紙調査によるものである。調査の詳細については、中村他編(2002)を参照していただきたい。

- (4) これまで日本の受験競争について指摘されてきた、相互鼓舞の機能をもつような「協同的競争」と、闘争的性格の強い「敵対的競争」(久富 1985)や、誰もがが一斉に同一の目標に向かう「同調的競争」(山村 1984)といった概念も「競争の状態」の考察であり、そういった状態を引き起こしたり、引き起こさなかったりする「構造の枠組み」をさらに深く検討していく必要があると言えるだろう。
- (5) その他にも、競争を生起させる条件に着目したものとして河野らの研究がある(河野他 1993)。河野らは、進学先が公立中心か、それとも有名私立なども含まれるかといった条件の異なる二つの中学校を比較した結果、学級内や学校内の受験競争の雰囲気の高さが、生徒たちの競争意識、反学校的意識と行動に影響していることを指摘している。しかし、選抜システムの問題としては考察されていない。
- (6) 東京都の高校入試制度に関しては、声の教育社(2000a)を参照した。
- (7) 内申書と筆記試験の比率は、4:6~6:4の範囲内で高校ごとに決められている。
- (8) 群馬県の高校入試制度に関しては、声の教育社(2000b)を参照したが、私立高校については、声の教育社(1998)を参照した。
- (9) 内申よりも学力検査の比率を高めるグループと、学力検査と内申の比率を同等にするグループの二つに分ける場合が多いようである。
- (10) ソウル市の高校入学制度に関する以下の叙述は、有田(2000)に依拠している。
- (11) しかしごく少数ながら、芸術高校、体育高校、外国語高校、科学高校など、エリート教育を行う高校がある。
- (12) 1999年現在、一般系と実業系の高校に通う生徒の比率は、全国で62:38である。われわれのデータ全体では、一般系高校に進学予定の者が72.2%、実業系高校に進学予定の者が22.6%となっている。
- (13) 江原道教育庁中等教育課の高慶植奨学士に対する聞き取り調査(聞き取り者は有田伸、実施日は2000年3月7日)による。
- (14) なお、聞き取り調査によれば、2001年度より筆記試験が廃止され、内申の成績、中学校長の推薦、特技などによる入学者選抜が行われることになっているという。
- (15) 群馬県B市の位置する学区において通学可能と考えられる公立高校は普通科6校、専門学科・総合学科高校が11校、計17校が存在する。それに対し、東京都23区の6つの学区には1学区あたり平均して12.5校の公立普通科高校がある。また、調査対象校は、4つの学区に散在しているが、それら4つの学区に立地するコース制、単位制、総合制、専門学科の公立高校数の合計は、平均して1学区あたり8.8校となる。隣接学区二つを通学可能範囲と考えるならば、専門学科などの高校は26.4校となり、自学区の普通科12.5校とあわせ、合計で38.9校となる。
- (16) 同様のことが、江原道A市についても言えるだろう。
- (17) 群馬県には、私立高校が全県で13校あり、そのうち3校がB市の位置する学区に存在する。隣接する2つの学区にある7校を含めると10校となる。しかしこれらの私立高校の多くは、公立高校の下に序列づけられており、多くの場合、公立高校を第一志望に、私立高校をいわゆる「滑り止め」にすることになる。もちろん、最近では、各私立高校では「特進クラス」や「特待コース」などを設けることにより、成績上位者の取り込みに力を入れているが、その数はごく少数にとどまっており、全体的には公立上位という格差構造には大きな変化はないと言える。それに対し、私立高校は東京都23区内に154校あり、調査対象の中学校が位置する4つの学区にある私立高校の数を平均すると20.3校となる。そして、私立高

校のステイタスも高いため、十分に第一志望校足りうるのである。

- (18) 高校の序列は、微細であるがゆえにランクが年度によって細かく変動するのみならず、数年・十数年単位では大きな変動も生じる。公立高校は内申書と筆記試験によって合否が判定されるが、私立は主として筆記試験によって判定されるため、同レベルの公立高校と私立高校であっても、いずれの学力が高いことになるのか明確ではない。これらのことから、東京都における高校の格差構造は、群馬県に比べ明確性・可視性・安定性が低くなると考えられる。
- (19) たとえば、今回の調査対象校のうち、東京都のある中学校が発行している『平成11年度 学校案内』に「平成9年度 卒業生進路先一覧表」が記載されているが、卒業生が151人のところ、進路先の都立高校は24校（定時制の2校を含む）、私立高校は55校（都外の3校を含む）であり、進学者がいちばん多い高校は男女合わせて10人という1校のみであり、平均すると1校あたり1.9人に過ぎない。
- (20) 群馬県では県立高校の前期入試（推薦入試）、後期入試（一般入試）という二回のチャンスがある。私立高校については、二月の初旬に入試が集中しており、受験する場合はいずれか一校を受験することが多い。東京都では、都立高校の推薦入試と一般入試という二回のチャンスがあるところは群馬県と同様である。しかし私立高校は、その数の多さから二月初旬の三日間のいずれか一日を試験日としており、複数の私立高校を受験することが可能である。実際、私立高校のステイタスの高さもあって、複数の高校を受験する中学生が多い。
- (21) この点については、中村他（2001）を参照。
- (22) なお、予想の外れた東京都については、後にまた検討することにする。
- (23) なお、紙幅の都合でデータは示さないが、ソウル市においては不安感を抱く層が学業成績の中の下から下の層に高いという関係が有意であり、群馬県B市ではいずれの学業成績にもほぼ均等に分布している。これも、両地域における選抜システムの特徴と対応していることは興味深い。
- (24) また、都立高校が第一志望である者に対して、都立入試に失敗した際には必ずその私立高校に入学するという確約のもとで、私立高校が「併願推薦」や「併願確約」などと称して優遇する制度も一般化していることも影響している可能性がある。しかし、残念ながら、今回の調査では進学先の高校における入試方法しか尋ねておらず、進学しなかった高校で推薦入試を利用したかどうかは分からない。第二志望や滑り止めといった高校での併願推薦・併願確約などについては、さらなる調査を期したい。
- (25) 内申書の点数は、学校内における学業成績の相対的な位置関係によって決定される。東京の中学生たちの多くが内申書を気にしているのならば、「学校内に閉じた競争」が生起し、競争感も高まるのではないかと考えられる。しかし、東京の中学生たちにとって推薦入試は多様な選択肢の一つにしかすぎない。たとえ推薦入試がだめであったとしても、それ以外の選択肢がまだ残されているのである。それゆえ、内申書を気にする割合が高いとしても、それが必ずしも学校内での競争には結びついていかないのではないだろうか。受験対象校の多様性と受験機会の多さという東京の選抜システムがここにも影響を与えていることになろう。
- (26) この問題については例えば「中央公論」編集・中井編（2001）、荻谷（2002）などを参照。

<引用・参考文献>

- 有田伸 2000 「教育制度」本田洋編著『海外・人づくりハンドブック 韓国』海外職業訓練協会。
- 「中央公論」編集部・中井浩一編 2001 『論争・学力崩壊』中央公論新社。
- Coleman, J.S. 1961, *Adlescent Society*, the Free Press.
- ドイチェ, M 1970 「集団過程に及ぼす協同と競争の効果」三隅二不二・佐々木薫編訳『グループ・ダイナミックス II』誠信書房。
- 藤田武志 1994 「中学生の進路決定過程に関する事例研究 一努力主義の採用と学業成績の層的認識一」『東京大学教育学部紀要』第34巻。
- 藤田武志 1996 「選抜システムと中学生の競争意識 一東京の事例に関する社会学的考察一」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第36巻。
- 藤田武志 2001 「学習時間の日韓比較 一中学生・高校生調査をもとに一」『上越教育大学研究紀要』第21巻第1号。
- 藤田武志・中村高康・有田伸・熊谷信司・金美蘭・渡辺達雄 2001 「学校・進路・学歴の日韓比較 一中学生・高校生調査をもとに(2)一」『上越教育大学研究紀要』第20巻第2号。
- 古畑和孝 1980 「協同と競争」古畑和孝編『人間関係の社会心理学』サイエンス社。
- 稲葉継雄 1993 「韓国の教育改革 『平準化』を中心として」『教育と医学』41巻8号。
- 乾彰夫 1990 『日本の教育と企業社会』大月書店。
- 荻谷剛彦 2002 『教育改革の幻想』ちくま書房。
- 河野浩・岩崎三郎 1993 「中学校における反学校的生徒文化に関する実証的研究(2) 一二つの中学校の比較分析を中心として一」『青山学院大学文学部紀要』第35号。
- 菊池城司 1992 「学歴・階層・職業」『教育社会学研究』第50集。
- 声の教育社 1998 『平成11年度受験用 群馬県公立高校5年間入試と研究』声の教育社。
- 声の教育社 2000a 『平成13年度入試用 東京都高校受験案内』声の教育社。
- 声の教育社 2000b 『平成13年度受験用 群馬県公立高校6年間入試と研究』声の教育社。
- コーン, アルフィ 1994 『競争社会をこえて ノー・コンテストの時代』山本啓・真水康樹訳, 法政大学出版局。
- 久富善之 1985 『現代教育の社会過程分析』労働旬報社。
- 久富善之 1993 『競争の教育』労働旬報社。
- 森博 1993 「競争」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学事典』有斐閣。
- 中村高康 1996 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立 一公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる一」『教育社会学研究』第59集。
- 中村高康・藤田武志・有田伸・渡辺達雄 2001 「学校・進路・学歴の日韓比較 一中学生・高校生調査をもとに(1)一」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編, 第50巻。
- 中村高康・藤田武志・有田伸編 2002 『学歴・選抜・学校の比較社会学 一教育からみる日本と韓国一』東洋館出版社。
- 中澤渉 2000 「推薦入試の中学生に及ぼすインパクト 一導入の理念と意図せざる帰結一」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻。
- 太田肇 1996 『個人尊重の組織論 企業と人の新しい関係』中央公論社。
- 竹内洋 1988 『選抜社会』メディアファクトリー。

- 山村賢明 1984 「学歴社会と受験体制 その日本の特質をめぐって」『青年心理』第46号。
- 安田三郎 1981 「抗争関係と抗争過程」安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編『基礎社会学 第II巻 社会過程』東洋経済新報社。
- 吉本圭一 1991 「戦後経済と教育の構造変動 一選抜システムの成熟と組織的取引の発達一」『教育社会学研究』第48集。

A Comparative Sociology on the Competitive Consciousness of Middle School Students between Japan and Korea: An Analysis Focused on the Entrance Examination System

FUJITA Takeshi*

ABSTRACT

In this paper, I investigate the competitive consciousness of middle school students, based on the questionnaire survey data collected in Japan and Korea. The analysis shows that the entrance examination system can be divided into three factors: the structure of school hierarchy, a choice of schools, and the way of selection, and that each factor influences the students' competitive consciousness in both countries.

The result suggests that the entrance examination system should be reformed not in line with an idealistic model, but in consideration of the relationship between the system and the individuals.

* Division of School Guidance and School Administration